

▼東京都

## 女性支援の経験を復興と防災体制づくりに活かす ～『東日本大震災における支援活動の経験に関する調査報告書』 ができました～

●東日本大震災女性支援ネットワーク (旧) 調査チーム 池田恵子・柘植あづみ

「防災基本計画」と「男女共同参画基本計画」に、災害対応への女性の参画と男女双方のニーズへの対応が必要ながはじめて示されたのは、2005年でした。東日本大震災は、それが実践に移された最初の大災害となりました。しかし、女性の視点を反映した支援活動を行うための仕組みは、実質的には存在しないといつてよい状態でした。そのようななか、誰が「女性支援」を担ったのでしょうか。「女性支援」は、どのように開始され、行われたのでしょうか。

(旧) 調査チームでは、2011年6月から2012年6月までの間に、女性団体、行政、NPO、個人など様々な立場で支援活動をされてきた40の団体・個人の方々から、被災者への支援の経験をお聞きしてきました。そのインタビュー結果をまとめた『東日本大震災における支援活動の経験に関する調査報告書』(B5版、158ページ)が完成しました。インタビューにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

支援者の方々のお話をお伺いするなかで、私たち(旧)調査

チームのメンバーの心にもっとも残ったのは、複数の支援者が語った「男女共同参画は根づいていなかった」という言葉です。その通りだと思う反面、女性の視点から災害支援をする団体や人が各地で生まれるようになったという変化を、この調査を通して感じました。今後は、ジェンダーや多様性の視点による災害対応が、災害支援にかかわるすべての人々にとって当たり前になるような体制が必要です。

この調査では、性別や多様な立場に応じた支援が必要であるという認識が一般的ではなかったなかで、支援者の方々が、女性や多様な立場の人々への支援を始めたきっかけや、女性のニーズを知るための工夫をお聞きしました。

また自立と意思決定を応援する支援のあり方、今後さらに女性支援を活かす体制、支援者の困難についても考察しました。地域で活動する女性団体と、行政の男女共同参画担当部署、災害対策本部、地域防災組織、そのほかの支援団体との連携のあり方。地域防災計画にどのように「女性支援」を記載していくべきなのか。「女性支援」の経験とスキルがある団体・人が担うべき専門的支援内容と、災害支援にかかわる団体・人であれば誰もが行うべき一般的な支援をどう分担するのか。また、ジェンダーや多様性の視点から支援する人々が必要とする支援とは何か。これらのことについて、支援をされた方々の経験にもとづいてまとめています。

今後の復興・防災に向けて、この報告書を、ぜひご活用ください。

■当ネットワークのホームページから購入を申し込みます(1部1000円、送料込)。また、目次、内容の一部をご覧いただけます。  
<http://risetotogetherjp.org/?p=3116>

### 連絡先

## 東日本大震災女性支援ネットワーク

住所：東京都文京区向丘1-7-8

TEL/FAX：03-3830-5285

E-mail：office@risetotogetherjp.org

Web：http://risetotogetherjp.org

twitter：@risetotogetherjp

●メールマガジンをご希望の方は事務局までメールかお電話でお申し込み下さい。



東日本大震災女性支援ネットワーク

Rise Together :  
Women's Network for East Japan Disaster<http://risetotogetherjp.org>協力：国際協力NGO オックスファム・ジャパン  
URL：www.oxfam.jp

# かたりば通信 2012.11

発行：東日本大震災女性支援ネットワーク／編集人：岡本美架

〒113-0023 東京都文京区向丘1-7-8 TEL：03-3830-5285 E-mail：office@risetotogetherjp.org twitter：@risetotogetherjp

▼東京都

## 「東北の女性をつなぐ～福島のお母さんたちと行く石巻～」 プロジェクト報告&これからの支援を考えるワークショップ

●ラブギャザリング理事 山田由美子

原発事故で避難生活を送る福島の方は、東京だけでも約9000人と、今も増え続けています。住み慣れた故郷、友人や家族と離れ、先が見えない不安な日々を送っています。震災から1年半が過ぎ、こうした思いや経験は忘れられがちですが、ともに分かち合うことが支援になり、孤独からの救いになります。そこで、東日本大震災支援団体ラブギャザリングは福島避難母子の会 in 関東と連携し、9月1～2日、福島のお母さん達と一緒に石巻等の津波の被災地を訪れ、復興を目指して頑張る女性達と交流をしてきました。「津波で全てを失った人たちが、この場所で本気で頑張っている」「そういう人達が福島の自分たちを理解し励ましてくれた」「私たちも石巻の人たちを応援したい」お母さん達の中にそんな気持ちの変化があったようです。被災した小学校も訪問したことで「自主避難に対する迷いもあったが、命を守るための選択だった」と自分に自信が持てたという方もいました。

周囲からは、多くの支援を受ける一方で「やってどうなるの？」という素朴な疑問も寄せられました。その答えを出したいと思い、10月8日に報告会&ワークショップを開催しました。

前半は、ラブギャザリング及び参加した福島のお母さんからのツアー報告。後半は、福島のお母さんから自主避難の体験談。「生の体験談を聞いたのは初めて」という人も沢山いました。そしてそれを受けて、ワークシート等を用いながら「もし自分の居住地が原発事故50km圏内だったら自主避難するかどうか」「自分が被災したらどんな支援をしてほしいか」という“自分ごと”で考えるグループディスカッションを実施。自主避難に

ついては、人それぞれ状況によって選択が違ふことが改めて分かりました。求める支援については「相談できる仲間やコミュニティ」「仕事や支援のマッチング」といったものから、メンタルケア、シングルマザー対策、子どもを預けられる場所、正確な情報、親子が寛げる場所、自分の職業を活かした具体的なアイデア等、参加者全員が自分がしてほしいこと、自分が出来ることについて考えました。

何が支援になるかは人それぞれ。ですが、いずれの場合も「相手の気持ちを理解し、自分ごととして捉えることから始まる」ということを改めて感じました。だからこそ、こうやって集まって「気持ちを共有し発信していくことが大事」という声が大多数でした。そういう意味で、今回のイベントは報告にとどまらず、未来に続く通過点であり、新たな始まりとなったことを実感しました。

### ■プロジェクトの内容

<https://readyfor.jp/projects/fukushima-ishinomaki>

### ■ラブギャザリングHP

<http://www.love-g.info/>

女川の被災した門脇小学校を訪問

報告会&amp;ワークショップの様子

## CONTENTS

p.2 ▼宮城県仙台市 日本女性会議 2012 仙台～きめる・うごく・東北から～報告

p.3 ▼岩手県盛岡市 ワークショップ「『わたし』のふっこう<sup>復興・復幸</sup> いわたのふっこうと女性のチカラ」報告p.4 ▼東京都 女性支援の経験を復興と防災体制づくりに活かす  
～『東日本大震災における支援活動の経験に関する調査報告書』ができました～

## ▼宮城県仙台市

## 日本女性会議 2012 仙台～きめる・うごく・東北から～報告

●東日本大震災女性支援ネットワーク 研修事業担当 浅野幸子・福田紀子



10月26～27日、仙台国際センターを会場に開催された「日本女性会議」に参加しました。参加者は約2,100名で、震災による痛みや悲しみの伴う経験と女性たちの懸命の取り組みをベースに、男女共同参画の課題を多様な角度から検討する内容となり、たいへん意義ある大会となりました。

## ●&lt;1日目&gt;開会式・基調講演・特別プログラム

初めに大会会長の奥山恵美子市長より開会あいさつがあり、被災という厳しい状況下で悩みながらも、仙台の男女共同参画関係者とともに日本女性会議開催を決断した経緯も話されました。続く基調講演では、佐村知子内閣府男女共同参画局長より、第3次男女共同参画基本計画に基づく推進状況と、特に日本の課題とされる女性の活躍と経済活性化、そして防災・復興と男女共同参画について多くの情報共有と政府の方針が示されました。

次の特別プログラムは「女性たちが語る 3.11～これまでと今と」。パネリストに、南三陸ホテル観光女将の阿部憲子さん、仙台市子育てふれあいプラザのびすく仙台館長伊藤仟佐子さん、河北新報社石巻総局記者の丹野綾子さん、福島県の桜の聖母短期大学准教授の二瓶由美子さん、阪神・淡路大震災で被災した経験から災害支援・防災活動に継続して取り組んでいる石井布紀子さんを迎え、イコールネット仙台代表理事の宗片恵美子さんによるコーディネーターで、震災の多様な経験を全国の女性たちとともに分かち合いました。

被災しながらも、職業人としての決断力でお客様・従業員・被災住民・関係業者に対応してきた南三陸ホテル観光女将の阿部さんを筆頭に、仙台市子育てふれあいプラザ館長の伊藤さんからは被災地の親子の状況が、河北新報社記者の丹野さんから被災地に密着した報道の重要性と被災者の実情を伝えることの難しさも伝わってきました。桜の聖母短期大学准教授の二瓶さんは、原発事故が若い女性たちに大変な不安を与える今だから

からこそ「福島女子短大が学生たちに伝える事、出来る事がたくさんある」とし、共に歩む「連帯」の大切さを力強く訴えました。

## ●&lt;2日目&gt;分科会・記念講演・シンポジウム

午前中は、6つの分科会が実施され、熱気にあふれた議論が行われました。

- ・第1分科会 復興・防災に女性の声を～出す、ひろく、生かす
- ・第2分科会 「困難すごろく」でみる女子の生きづらさ(貧困問題)
- ・第3分科会 役に立つ「人権」の話(DVや虐待と人権感覚)
- ・第4分科会 東日本大震災・原発事故と母子支援～妊産婦と赤ちゃんをどう守れるか～
- ・第5分科会 企業でキャリアを積むということ～わたしたちのネクストビジョン～
- ・第6分科会 支援から交わりへ～「外国人妻」が地域住民になる日～

第1分科会では、仙台の女性たちへのアンケート調査によって浮かび上がった課題を共有した上で、自治体の防災政策や地域防災活動、そして復興において、どのようにしたら男女共同参画の視点を取り入れることができるのかが、多様な事例とともに提起されました。

第6分科会は、結婚を機に韓国・中国・フィリピンから日本へ移住した女性3人と、日本から韓国に移住した日本人女性がパネリストでした。大変な苦労を経て今を切り拓いてきたみなさんですが、「被災と復興の過程は、私たちにとって地域の人たちの役立てるチャンスでもあり、貢献して行きたい」との前向きな発言が印象的でした。

午後はノルウェー王国より、元首相のブルントラントさんのビデオメッセージと、若手女性国会議員トレッテバルグステューエンさんの講演からスタート。世界の1・2位を争う男女平等先進国のノルウェーでさえ当初はその推進に抵抗もあったものの、強い政治的意志と実践・実行の継続が、成功を導いたことがわかりました。

シンポジウム「きめる、うごく、東北から」では、ワークライフバランス研究者や被災地の女性支援に取り組んで来たNGOスタッフらを迎え、コメンテーターは前千葉県知事の堂本さんとトレッテバルグステューエン議員、コーディネーターは東北大学大学院教授の辻村みよ子さんで進められ、男性の多様な生き方も可能な社会の実現や女性の社会参画、特に政治参画と経済的なエンパワメントの重要性も改めて浮き彫りになりました。

以上、日常の男女共同参画の実践抜きにして防災・復興も安全・安心もあり得ないことがわかりましたが、副実行委員長であるイコールネット仙台代表理事の宗片さんが「仙台宣言」を高らかに読み上げると決意が表明され、閉会となりました。

## ▼岩手県盛岡市

## ワークショップ「『わたし』のふっこう いわてのふっこうと女性のチカラ」報告

●東日本大震災女性支援ネットワーク世話人、エンパワメント いわて 山下梓

2012年10月6日、岩手県盛岡市でワークショップ「『わたし』のふっこう いわてのふっこうと女性のチカラ」(主催:エンパワメント いわて もりおか女性センター市民団体支援事業採択企画)が開かれました。エンパワメント いわては、もりおか女性センターの主催講座「思いを力に変える、女性のためのエンパワメント塾」を修了した岩手県内各地の女性からなるグループです。

ジェンダー平等や「人の多様性」の視点から、ハード面の復旧・復興だけでなく「私たちひとりひとりにとってのふっこうについて学び、考える」機会にしようと、エンパワメント いわてが今春実施した被災女性・支援女性の経験に関するアンケート調査のまとめを素材に行いました。

## ●岩手の被災・支援女性を対象とした「東日本大震災における女性の経験に関するアンケート調査」中間報告

ワークショップ前半では、高橋福子代表から、エンパワメント いわてが今年4月～5月に調査票により実施した「東日本大震災における女性の経験に関するアンケート調査」について、このような取組をするに至った経緯をまじえて中間報告がありました。

回答者は岩手県内の被災女性・支援女性150名。国籍や障害の有無と種別、性的指向も含めた属性・背景情報や、「震災の経験について」、「復興に向けて」等に関して選択式と記述式で30項目を質問。「震災の経験について」では、被災・支援の状況や性暴力の経験、被災・支援したことによる心身への影響、支援を求めた経験についても尋ねましたが、月1回の集まりを基本とする活動ではすべての設問について集計・分析を終えられず、ワークショップ当日は、被災した女性や復興支援にあたった女性が「復興」をどのようにとらえているかを知りたいと聞いた設問29「あなたにとって、地域やあなた自身がどのような状態になったら『復興』したといえますか?復興後をイメージしたとき、地域やあなた自身はどのような状態ですか?」について集計・分析した結果が報告されました。

## ●復興とは「住まい・家族」「気持ち」「仕事」「街の整備」「生きがい」

設問29の回答は、「住まい・家族」「復興全体のイメージ」「気持ち」「仕事・経済」「インフラなどの街の整備」「生きがい」「がれき」にテーマを分類できた一方、無記入も目立ちました。高橋さんからは「道路が整備され、仮設住宅から、我が家に入居

できればいいなあ」「もとの生活が出来て、ホットして、のびのび出来た時」「皆様からの支援がなくても大丈夫な町になった時。不公平感のない自分の力で頑張って行ける様になった時」「盛岡に暮らしている私が、沿岸に行った時、負い目を感じなくなれば、その時が本当の復興」「経済的に不安な生活が地域全体に広がった時。働く場所がある時」等、岩手県の被災女性、支援女性が回答した「生の声」も紹介されました。

ワークショップ後半は、東京学芸大学非常勤講師・早稲田大学「地域社会と危機管理研究所」客員研究員の浅野幸子さん、コメンテーター・ファシリテーターに迎えてグループワーク「『わたし』にとってのふっこうを考えてみよう」が行われました。浅野さんは、阪神・淡路大震災や三宅島噴火で復興支援に関わった経験もふまえて「らせん状の進み具合にいら立つ気持ちもあると思うが、ふっこうはひとりひとりのリズムでいい。ハード面だけでなく、人づくりが重要。立ち上がるとする復興のプロセスを大切にしてほしい」とコメントされました。参加者からは「グループワークは、言いやすい雰囲気ですべてを話せてよかった」「講師の先生のまとめの考え方がたくさんの実りになった」等の感想がありました。

エンパワメント いわての「東日本大震災における女性の経験に関するアンケート調査」は、東日本大震災から2年を迎える2013年3月までに集計・分析を終え、多様な女性の視点から考える復興に向けた提言を添えて公表予定です。

■エンパワメント いわて empowerment.iwate@gmail.com

コメンテーター・ファシリテーターの浅野幸子さん



グループワークの様子

